

通信



第 39 号

2022 年 3 月 20 日発行
年 2 回発行

神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

子どものための
コンサート・シリーズ
オルガン・コンサート

「子どものためのオルガン・コンサート」オルガンの音色に隠れた動物を見つけてみよう！
「子どものためのコンサート・シリーズ」第五十九回を十月十六日（土）に本学講堂で開催しました（第一部十一時開演、第二部十四時開演、各六十分、来場者数・第一部子ども五十三名、大人六十名／第二部子ども七十五名、大人八十名、計二百六十八名）。

出演はオルガニストの大木麻理先生（ミューザ川崎シンフォニーホール・オルガニスト、本学音楽学部非常勤講師）と音楽学部オルガン専攻生二名（三回生の森友歌、一回生の村田沙耶）の三名です。このコンサートでは、今年が没後百年のサン＝サーンスの組曲《動物の謝肉祭》を大オルガン一台だけを使って全曲演奏しました。パイプ・オルガンの仕組みや音色について分かりやすく説明するために、プロジェクトにかわいらしい動物のシルエットやイラスト（制作・森）を映し、子どもたちの声を聴きながら進めました。



コンサートでは、舞台進行役の学生二名が今回演奏する二階の大オルガンを紹介してから、動物さん探しに出掛けます。演奏前にはプロジェクトにシルエットを映し、曲中に出てくる鳴き声を部分的に聴いてもらって、「この動物さんは誰だろう？」と子どもたちに問いかけ、様々な意見に耳を傾けながら一曲目の《序奏と獅子王の行進曲》（大木先生ソロ）に入ります。

エットを映し、曲中に出てくる鳴き声を部分的に聴いてもらって、「この動物さんは誰だろう？」と子どもたちに問いかけ、様々な意見に耳を傾けながら一曲目の《序奏と獅子王の行進曲》（大木先生ソロ）に入ります。



演奏後、カラーのスライドに切り替えて正解（動物の王様ライオン）を発表しました。続けて、《雌鳥と雄鶏》を鳴き声を想像しながら聴いてもらい、《驃馬》《亀》の演奏後にパイプ・オルガンの仕組みと音の出し方について、大木先生に教えて頂きました。お客様

からは、「なかなかオルガンについて詳しく知る機会がないので貴重でとてもよい」「分かりやすく勉強になった」などの声を頂きました。

次に、解説を活かしてオルガンの一番低い音を使った曲《象》を聴いてもらいました。曲の感じ方について二択の挙手制（重い感じ・軽い感じ）で意見を聞

き、各人が考えながら聴いてくれていたと実感することができました。続いて〈カンガルー〉を演奏し、〈象〉との対比を感じてもらいました。

次は、何と〈水族館〉が登場して、大きく映し出された色鮮やかなイラストに客席の興味も惹きつけられていたようでした。会場アンケートでは「聴いたことがある曲で親しみやすい」「音色が意外でおもしろい!」「魚が泳いでいるように聞こえた」と、この曲への反響が多く見られました。



プログラム中盤では学生二名（森・村田）の連弾で五曲（作曲・村田）披露しました。連弾は視覚的にも楽し

めること、また音の分厚さと種類について実際に音を鳴らして説明しました。まず、〈耳の長い登場人物〉（森の奥のかっこう）〈大きな鳥籠〉の三曲を演奏し、演奏前や曲間に次に登場する動物のヒントを出して、イメージしやすいように工夫して進行了ました。ここで作曲家サン＝サー



ーンズについての説明を挟みつつ、残りの連弾二曲へと進みます。一曲

目の〈ピアノスト〉はとても大きな音で始まるため、



その音に耳を押さえている子どもが何人もいたそうで、オルガンの迫力が伝わった瞬間だとうれしく思いました。二曲目の〈化石〉では、曲のどこかに〈きら

きら星〉のメロディーが出てくるので、それを探しながら聴いてもらいました。今回編曲を担当するに当たって、オルガンならではの問題点として、音色（スト

ップ）を曲中で変更するタイミングや、どの鍵盤でどちらが演奏するか、という点に苦慮しました。本来、二階大オルガンを演奏している様子（連弾では腕が四本ある状態など）を舞台上のスクリーンで映して、それを見ながら演奏を楽しんで頂くはずでしたが、当日の機材トラブルにより実現できなかったのは残念です。会場アンケートでも「演奏者の姿が見たかった」との意見を多数頂き、次回はぜひ実現をと思います。

続いて、《動物の謝肉祭》の中でも一番よく知られている〈白鳥〉（大木先生ソロ）を演奏しました。主旋律を手ではなく、パイプ・オルガンならではの足鍵

盤でお届けしました。最後に、



今まで登場した動物さんたちがみんな集まった色とりどりのイラストと

共に、〈終曲〉を演奏して華やかに締めくくりました。

終演後には、簡単に作れるパイプキットをプレゼントしました。初めてのアウトリーチでしたが、たくさんの方に支えられて実現できたことをうれしく思います。改めて演奏することの楽しさや喜び、それを一緒に共有できる音楽のすばらしさを強く感じるコンサートとなりました。

（村田沙耶・記）

クリスマス・コンサート

「子どものためのクリスマス・コンサート」世界中から音楽の贈り物」（子どものためのコンサート・シリーズ第六十回）を、十二月十一日（土）に本学講堂で開催しました（第一部十一時開演、第二部十五時半開演、各六十分、来場者数・第一部二百八十八名／第二部二百五十七名、計五百四十五名）。

出演は谷田奈央（アウトリーチ履修五期生／声乐）、東瑛子（同六期生／ヴァイオリン・打楽器）、松尾璃奈（編曲・ピアノ・オルガン）、安達梨紗（同十四期生／打楽器）、玉置華（同十九期生・大学院音楽研究科二年生／ヴィオラ）、中村未奈（本学四年生／ピアノ・打楽器）の六名です。現役の学生とさまざまな年度の「音楽によるアウトリーチ」既習生が縦割りで集まりました。

コロナ禍を忍んでいる子どもたちに、多様な楽器編成や演出上の工夫を凝らした内容で「非日常な時空間」を味わってもらうことを大きなねらいとして、楽器の特徴や世界のクリスマスについて「学び」を盛り込みながら、音楽を使って子どもたちと同伴の大人に「楽しい」「リラックスできる」時間を届けることを意識しました。

会場の明かりが落ちると、後方から鈴の音が鳴り始めます。鈴を持った奏者が舞台に登ると同時に幕が開き、アンダーソン作曲（そりすべり）（編曲／松尾璃奈、以下、＊と略記）が始まります。子どもたちのワクワクする顔を見て、自然と笑みがこぼれる出演者たち。マザーグースの（クリスマス）の十二日間（の旋律に乗せて「さあ始まるよ、クリスマス・コンサート 何が出てくるのでしょうか」と楽器を



ダーソン作曲（シンコペーテッド・クロック）（＊）では目覚まし時計も楽器として登場しました。

ここからは贈り物を探しに世界に飛び立ちます。まずはもちろん日本から。《唱歌メドレー》として（北風小僧の寒太郎／雪／冬景色）をメドレーで歌います（＊）。次はロシアへひとつ飛び



び…の前に（あたま・かた・ひ

紹介していきます。最後はオルガンも入って、講堂中に音が響きわたります。第三曲のアン

ぎ・ぼん）を使って、みんなで身体を温めます。それに乗ったらずまずシートベルトを付けて、（そりすべり）のメロディーに乗って動きながらロシアに向かいます。たどり着いたロシアで聴こえてくるのは、チャイコフスキー作曲バレエ音楽（くるみ割り人形）より（トレパーク）（＊）。次に向かったオーストリアでは、教会でミサが行われていました。パイプ・オルガンと歌でモーツァルト作曲（アヴェ・ヴェ・ヘルム・コルプス）が響きます。お隣のチ



エコへ行くと雰囲気が一転して、ピアノ連弾によるドヴォルザーク作曲（スラブ舞曲）より第八



番。狂乱のダンスでクリスマスをお祝いしています。南半球のオーストラリアに行く、

海の音が聞こえてきます。前からオーシャンドラム、後ろからジャンベが登場して、アクティビティで真夏を表現しました。次のアフリカはシュミット作曲

「ガーナ

イア」。リズムを基調とした太鼓とマリンバの音が流れます。プエルトリコでは有名なクリスマスソング、フエリシアーノ作曲（フエリス・ナウイダ）でフェステ



イバル。ドイツに行くと、聖なるクリスマスを見守るツリーがありました。ヴィオラがゆつたりと「へもみの木」を弾きます。

講堂の天井にある照明になぞらえて、

「クリスマスツリーの天辺



に輝く星は、イエス・キリストの誕生を知らせた大切な星」というお話をした後、世界からの贈り物を探して辿り着いたのは、ベツレヘムにある星と、そしてこの音楽でたとえました。

その上で、私たちが毎年のクリスマス礼拝で大切にしてきた一曲、デイビス作曲／中村健訳詞「世界中で一番すてきな誕生日」を歌いました（*）。

例年であればここからは「みんなと一緒に歌いましょう」の

コーナーですが、今年は「聴かせるクリスマスソング」として、出演者全員で「あわてんぼうのサンタクロース」（赤鼻のトナカイ）（*）、マーティン作曲／中村健訳詞・編曲（あなたの心に小さなメリークリスマスを）、ピアポント作曲（シングル・ベル）を演奏して、コンサートを締めくくりました。

新型コロナウイルス感染拡大防止対策の制限がある中、集中して聴いてもらえるよう一曲の長さは最長三分とし、曲数は十五曲に上りました。終演後はお土産として「打楽器事典・楽器工作セット」を配布しました。

会場アンケートでは「出演者みんなが笑顔で演奏していて、心温まるコンサートだった」「子どもも手足・身体を使って参加でき、大人も世界の音楽について勉強になって楽しめた」「毎年当選（来場）したい」などと好

評を頂きました。



今回は、それぞれ学年が違縦割りのメンバーが集まりましたが、これは従来なかったことです。流動的にメンバーが変わっても活動しやすいように、「アウトリ

ーチ・プロジェクト あっぷぶ」という名前を付けています。今後はアウトリーチの既習生が学年の枠を超えて活動していただける土壌を作りたいと思います。

（安達梨紗・記）

歴代センター・スタッフの声

早野紗矢香さん



私は第一期生として「音楽によるアウトリーチ」を履修し、学部を卒業後、

津上先生のアシスタントとして働きしました。アウトリーチ・センターの開設前は津上先生の研究室ですべての作業をしていたので、センター開設に当たっては、机や椅子、パソコンなど必要な備品を一から揃えていくところから始まりました。そうして、増員されたスタッフと共に本格的にアウトリーチ・センターで働き出しました。アシスタントとしてアウトリーチの授業に関わっていたので、自分の持っている情報を新しいスタッフと共有できるように、手引きを作る必要があると思って資料を作り出しました。自分にとって当たり前前のことでも、話さなければ分からないこともあると気付いて、少しずつ項目を増やしていきました。当初は前例も

なく、手探り状態で情報を集めながら進めていったのを思い出します。日替わりで複数のスタッフが一週間にわたって、スタッフ全員がひとつのプロジェクトに関して同じ情報を共有できているのか、全体を把握しながら進めて行くのはなかなか大変でした。今は遠距離でもビデオ会議などで顔を合わすことができますが、当時の主流はメールです。文字だけでは難しいことでした。

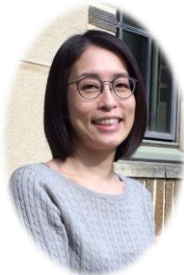
当然ながら、年度毎にアウトリーチを履修する学生の個性が異なり、各人の発想も違うので、興味深くサポートさせて頂きました。学生をサポートする上で、私自身も多くを学ぶことができました。様々なプロジェクトに関わることで、幅広い専門分野の方々にもお会いできて、新たな発見をしたり、視野を広げたりすることができました。

近年、アウトリーチ・プログラムへの参加がきっかけで音楽を始めたお子さんが現れたり、かつての子どもの参加者がアウトリーチを受講する学生になっていたりすると知って、誰かが音

楽と関わるきっかけとなる場に居合わせることができたのか、と思ひ、とてもうれしく思います。一から始まったこの「音楽によるアウトリーチ」が今日まで常に進化しながら続いているのは意義深いことだと思います。既修生が卒業後も何らかの形で授業の経験を活かし、各地で独自のアイデアを発揮して活躍されている姿を拝見して、すばらしいことだと思います。

私自身もオルガニストとして、この貴重な体験を活かしつつ、今後、さらに工夫を凝らして音楽活動を続けていきたいと思っています。

寺澤彩さん



私がアウトリーチ・センターに在籍していたのは二〇〇五年か

らの十三年間です。あつという間だったような、そうでなかったような、いろいろな思い出や出来事が凝縮された時間を過ごしました。

二〇〇五年十月にアウトリーチ・センターが設立された時、私は三月に大学院を修了したばかりでした。社会生活の右も左も十分に分からないまま、センターでの仕事が始まったことを覚えています。

特に二〇〇五年度からの四年間は、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に選定されたことで、従来のアウトリーチ活動に加えて、国内外からのゲスト・ティチャーを迎えた講演会、ワークショップなど、新しい事業活動が立ち上げられ、予想以上に目まぐるしい毎日でした。

チラシ作成などの広報活動、関係者との事務連絡、当日のイベント運営など、慣れないことばかりでしたが、センター・スタッフ同士、お互い得意分野を生かして助け合いながら、先生方や事務室のお力も借りながら、なんとか前に進んでいたように思います。

大きなイベント前になると、守衛さんが音楽館を閉めに来る時間帯までスタッフ総出で働くこともあり、その時は辛く大変に感じたこともありましたが、

参加して下さった皆さんのうれしそうな、楽しそうな笑顔を見ると、「よし、次もがんばるしかない!」と思ったものです。

たくさんさんの学生との出会いも思い出深いものです。色々な個性を持った者同士が協力し合い、時にぶつかり合いながら、ひとつのものを作り上げていくことの大切さを教えてもらいました。そんな皆さんが卒業後、母となつて、お子さんと一緒に学内コンサートに來場してくれた姿を見ると、長い時間をかけて、いろんなことが一つの輪のように繋がっていくのを体感することできました。

私と「音楽によるアウトリーチ」の関わりは、学部の二年生の時、津上先生が企画された音楽プログラムの見学会に、同級生の早野紗矢香さんと一緒に参加したことから始まりました。翌年、本授業の一期生となり、卒業後にスタッフとなつて、こんなに長い間、本学のアウトリーチに関わることになるとは夢にも思っていませんでした。

今では私の人生の大事な糧となつていきます。十三年間スタッフを務めることができたのは、

津上先生をはじめとする本学関係者の皆様と、歴代センター・スタッフの皆さんに支えて頂き、本学のアウトリーチ活動を必要として下さる多くの声があったお蔭だと思っております。心より感謝申し上げます。

今回、この文章を書きながら、パソコンが得意な仲間が中心となつて『アウトリーチ通信』の創刊号を作り上げたことを思い出しました。それから十六年、今も同じスタイルで発行され続けていることを大変うれしく思います。

これからも本学のアウトリーチ活動が益々社会から必要とされ、盛り上がりつついかれますことを切に願っております。

革島玲奈さん



通信ももう三十九号になるとは、時が経つのは早いものです。情熱とパワーにあふれた

仲間と過ごした時間は、本当に濃くかけがえのないものでした。懐かしく思い出します。私はア

ウトリーチが開講される前年度の学年でしたので(とても残念に思っていました)、期間は短かったもののスタッフとして勤務しながら、たくさんさんのことを経験させて頂きました。アウトリーチ・センターが立ち上がったばかりで、備品選ぴから様々なデザインや書式の作成、スタッフ間の情報共有の方法など：多くのことが一からで試行錯誤、日々手探りでした。全員がよりよくしていこうと考え、前へ前へと毎日一生懸命にがんばっていました。

コロナ禍でコンパクトに暮らす日々ですが、街のあちこちから音楽を気軽に聴ける日が早く戻ってきますことを願ってやみません。

松川峰子さん



私はアウトリーチ・センター開設時のスタッフとして勤務しました。

メンバーは気心の知れた同窓生でしたので、意見交換をしやすく、恵まれた

職場環境だったと思います。アウトリーチ既習生として「学生時代に経験したことを生かせる」という期待もありました。

センターは開設一年目より学校や病院、美術館、楽器店などから演奏依頼を受けて、私は裏方の業務を担当することもあれば演奏を担うこともあり、また大学の「子どものためのコンサート」にも度々、出演の機会を頂きました。兵庫県立芸術文化センターへ舞台装置の見学に行ったり、音楽学科と英文学科のコラボレーション企画に携わったり、たくさんさんの経験をさせて頂いたと思います。事務的な仕事と演奏活動の両立は慌ただしい日々でしたが、貴重な社会勉強になりました。

センターを退職後は『アウトリーチ通信』やホームページを目にして、様々な活動が継続されていることを知り、後輩たちの活躍を励みに感じていました。現在も「子どものためのコンサート」には多数の来場者があるようであれしく思います。コロナ禍で病院などでの訪問演奏は実施がむずかしい現状かと思いますが、またいつの日か音楽を

お届けできる日が来ることを願うばかりです。

アウトリーチの活動は「大学を卒業した後、どのように音楽と関わっていくか」という問いにヒントやアイディアを与えてくれる素敵な取り組みだと思います。今後の活動の継続と発展をお祈りいたします。

最後になりましたが、アウトリーチの授業、センターの設立・運営など多岐にわたってご尽力下さいました津上智実先生に心より御礼を申し上げます。

中村公美さん



パソコンが得意でセン
ス抜群、本
通信のヘ
ッド・マー
クのデザイ
ンをしてくれました。「コントラ
バスの神様」と称されるゲリー
・カーが得意とするキッズ・
コンサートを本学講堂で日本初
演できたのは、中村公美さんと
その師、南出信一先生のお蔭で
す。
(津上・記)

南香代子さん



性格も声も
明るいソプラ
ノで、「子ども
のための七夕
コンサート」
の織姫役をピ
ンクのチマチ
ヨゴリ姿で演
じたのが南香代子さんです。新
幹線の車内販売のアルバイトを
したり、苦労していました。卒
業後には演奏グループ「ピッコ
ラ・ムージカ」を結成しました。
(津上・記)

井本彩子さん



私がアウ
トリーチ・セ
ンターで働
いていたの
は、もう十三
年も前にな
ります。普通
の事務作業
には大体前例があり、先人の教
訓を守ることに重点を置かれる
ことが多いです。が、ことアウ
トリーチ・センターの業務では
前例そのものがないケースが多
く、海外から来る講師のために

ホテルの下見に行ったり、詩の
イベントのために著作権を調べ
たりと、何事も手探りでコンサ
ートや行事の準備をしていたこ
とが懐かしく思い出されます。

ひとつ印象に残っていること
があります。それは「子どもの
ためのコンサート」に車椅子の
お客さまが来られ、講堂の長椅
子運び出して車椅子席を作っ
て鑑賞頂いたのですが、その保
護者の方に「まさかコンサート
に来られるなんて思ってもみな
かった」とお礼を言われたこと
です。準備してよかったと思う
反面、なかなか身体障害者がコ
ンサートに来られない現実があ
ると知った出来事でもありまし
た。今は改正バリアフリー法も
施行され、当時よりは前進して
いると思います。

今は女学院を出て一般企業で
働いています。この流れの速
い時代の中、あの時に培った「誰
もやったことがないことを、自
分の考えた通りにまずやってみ
る」という気概のようなものは
今でも仕事の支えになっています。

三上昌子さん



センター長
の津上が海外
研修で一年間、
学校を離れる
時に、年上の
人がいた方が
センターが落
ち着くだろうという配慮で、斉
藤言子先生がご自分の同級生か
ら紹介して下さったのが三上昌
子さんです。思慮深い温かなお
人柄で、授業の進め方について
も具体的な助言を下さって、そ
れは今に至るまで実践していま
す。
(津上・記)

藤野直さん



私がセン
ターに勤務
し始めたの
は卒業の翌
年、二〇一
一年五月でし
た。当時のセ
ンターは一
日一人勤務体制だったので、右
も左もわからない状態で一人
勤務がとても不安だったことを
憶えています。多岐にわたる業
務の中で、特に「子どものため

のコンサート」に関しては、学内の調整、出演者や関連業者とのやりとり、チケット申込対応、当日の学生スタッフの手配や手引き、その他列挙できないほどやること盛り沢山！会えないスタッフ間で進捗状況を共有するのも大変でした。準備はもちろん、コンサート当日も怒濤。早朝から夜までほぼ立ちっぱなし、走りっぱなしの一日でしたが、それでも終演後、楽器体験を終えて帰っていく子どもたちのきらきらした表情と傍らの穏やかなご両親の顔を見ると、毎回こみあげてくるものがありました。また、このドタバタなコンサート開催の裏で、私がいつもひとつりと楽しみにしていたこと…。それは、センター・スタッフの皆さんに会えること！各々が各自の持ち場で尽力し、その結果コンサートが滞りなく終演を迎える達成感と信頼感は何とも気持ちのいいものでした。私のセンター勤務時代の一歩の財産は、今もなお尊敬してやまない先輩方と、誠実で心強い後輩たちと分かち合った時間そのものです。特に先輩方は、卒業したてで気持ちばかり熱く余裕のない私に、

言葉ではなく背中での「仕事にも人にも真摯かつ謙虚に向き合う姿」を見せて下さいました。センター勤務で経験したこと、教えて頂いたことはすべて、今も私の道標です。まだまだ遠く及びませんが、いつの日か先輩方のように朗らかで心柔らかく、本当の意味で芯の強い女性になれるよう、今後も精進したいと思います。

今回、薄れゆく記憶を辿りながらの執筆となり、あまり具体的なエピソードが語れず申し訳なく思います。ただ、このような機会を頂いたことで、過去の自分を振り返り、仕事やアウトリーチについて再度考えることができました。学生時代にアウトリーチを履修したこと、そして卒業後もスタッフとして関わらせて頂いたことは、私の人生の糧であり誇りです。最後になりましたが、未熟な私を見守り、育てて下さった津上先生に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



井上真理子さん



素敵な

方々に囲まれていた、センターはそんな場所だったように思います。セ

ンターに関わるすべての方々が、お客様に楽しんで帰って頂きたい、何か素敵な気持ちを持ち帰って頂きたい、というような気持ちで溢れていたと思います。

誰に対しても背中を押してくれる心強いアドバイスを下さったり、安心する笑顔で接して下さったり、頼れる皆様というだけでなく、人としてこうありたい、そう思う方々で一杯でした。

私自身はと言えば、センターのフライヤー・デザインや企画内容、演奏依頼などで会場に赴いた時には、奏者の立つ位置など音のバランスを考えて意見を言わせて頂いたり、未熟ながらもそれまでの自分の積み重ねや経験があったからこそ、自分という存在がアウトリーチ・センターの歯車の一つになれたと感ずることができて、やり甲斐を感じることができました。

木村真理子さん



よく思い出すのは、「子どものためのコンサート」開演直前の熱気です。今から何が始まるのだろうというお客様のワクワク感を肌で感じたことでした。今では子どもとコンサートを聴きに行く側となりました。スタッフの皆さんは大変だとは思いますが、楽しみにしている人がたくさんいます。これからも多くの人に素敵な音楽を届けて下さいますよう応援しています！

アウトリーチ・センターで勤務した期間は約一年でしたが、私にとつては学びの多い貴重な期間でした。その一年間の二〇一三年度には、十一回のアウトリーチ実習とコンサートが行われました。

特に思い出に残っているのは学内で年三回行われる「子どものためのコンサート」です。毎回抽選になるほどの人気で、初めは驚きました。スタッフとし

ての仕事は、ホームページでの募集から始まり、メールでのやりとり、当日の補佐、撤収まで、コンサートの一連の流れを学ぶことができました。

現在二児の母になり、いつか子どもと一緒にこのコンサートに行きたいと思っています。大好きな神戸女学院大学のコンサートに我が子と足を運ぶのが今から楽しみです。

コンサートを開催するには、演奏者はもちろん、スタッフにも多くの準備があること、予期せぬことが起こっても冷静に対応できる判断力が必要だと知りました。無事に終演した後の達成感はすばらしいものでした。

アウトリーチ・センターで学んだこれらの経験は、現在自分で発表会やコンサートを企画する際に活かすことができています。コロナ禍で様々な制限がある生活の中、音楽は人の心に潤いや彩りを与えてくれる、なくてはならない存在なのだと改めて感じています。これから素敵なコンサートの開催を楽しみにしています。

中川裕美子さん



私は本学卒業後の一年間、センター・スタッフとして勤務させて頂きました。社会人一年目で

右も左も分からない中、たくさんのご指導を頂きました。大好きなキャンパスに通える喜びを感じながらも、学生ではなく社会人として通っていることの違いが曖昧な感覚だった未熟な私に、津上先生は厳しい言葉も交えながらしっかりとご指導下さいました。

その後、一年でセンターを退職し、次の職場では秘書職を務めました。が、センター勤務で教えて頂いた電話やメールでの応対、コンサートでお客様を迎えた時の細やかな心配りなど、センターでの経験があったからこそ業務をこなすことができました。私は在学中にアウトリーチを履修していませんでしたが、実習やコンサートの準備の中で、演奏外の改善点について多くの気づきを得ることができました。

私にとって社会人一年目をセンター・スタッフとして勤務できたことは、学びの多い経験になりました。津上先生をはじめ女学院の諸先生方、事務室やスタッフの皆様には心より感謝を申し上げます。

増田明日香さん



センター・スタッフとして約四年を過ごしました。

その中で活動記録集を作成した時のことをよく覚えています。過去の資料を掘り出しながら、既修生の方々に画像の行方を尋ねたり、初めて映像編集をしたり、多くの方に助けられながら出来上がった冊子を見た時には大きな達成感がありました。

七夕やクリスマスなど歴史ある学内コンサートでは、毎回演奏者により趣旨が変わるので、内容によってスタッフの動きを整え、学生スタッフと一緒に新鮮な気持ちで挑んだものです。学生時も関わっていたものの、

コンサートを円滑に進めるために、センター・スタッフが相当前から準備を始め、サポートしてくれていることに改めて気づき、何事も必ず支えてくれる人がいること、そんな根柢の忘れてはいけない部分は今でも大切にしています。

学外実習で学生の変化を目にすることができたのは特別な経験でした。最初は戸惑いながらMCをしていた学生が堂々と話せるようになったり、演奏する姿も自信溢れるものになっていく姿を見たり、一年を通して関わるからこそわかる変化であり、素敵な気づきでした。

現在は退職から四年が経ち、業務の中で得たスキルを自分の公演や企画で活かしています。コロナ禍以前に豊洲ピットで企画した大型イベントでは、裏方と演者の双方を担ってやり遂げることができたのは、本学での経験があったお蔭です。今後アウトリーチを通して素敵な演奏家が巣立っていきますように、益々のご発展をお祈り申し上げます。

朝山加奈子さん



二〇一五年から四年間、アウトリーチ・センターと連携ルームに勤務させて頂きました。「子ども

のためのコンサート」では受付や会場周りを担当しました。お客様が安心して来場できるよう準備する責任があり、学生スタッフが働きやすくするにはどうしたらいいかを常に考えていました。各人に合わせたマニュアルを作ることで学生が働きやすくなるのがうれしかったですし、コンサートを作るこの大変さを身をもつて感じました。「子どものための音楽作りワークショップ」では、イギリスから招いた講師の滞在のお世話やワークショップの準備に携わりました。演奏面に加え、コミュニケーションの大切さや創造力を養えるこの講座で、自分の殻を破って成長する学生の姿を見ることができたのは一番やりがいを感じたところです。「受講してよかった」という学生の言葉が私の励みになっていました。

学びの場を様々な面でサポートすることの難しさと喜びを、津上先生の元でたくさん学ばせて頂きました。これからも本学のアウトリーチ活動のさらなる発展をお祈りしています。

神田幹子さん



私は、二〇一九年四月からの半年間をセンター・スタッフとして働きました。学生時代にアウトリーチを

履修して実習をする中で、センター・スタッフの存在は知っていましたし、サポートをしてもらっているという実感もありました。しかし、その時の自分にとだけ支えてもらっていたか伝えていたか、センター・スタッフとして働いてみて大変さを痛感しました。大変だったのは多様な業務です。外部組織へのアウトリーチの斡旋や年に三回行われる「子どものためのコンサート」の準備、履修生の実習先への連絡など、すべてのことが目まぐるしく過ぎ去

っていったように思います。覚えようとがんばりましたが、努力不足で迷惑をかけることも多々ありました。そんな中でも私は学生と関わることができたのがとてもよい経験となりました。フレッシユな感覚や創造力でコンサートを作り上げていく皆さんと触れ合えたことで、私も閃きや感動をもらうことができました。半年間という短い期間ではありましたが、私自身が大きく成長できた大切な日々となりました。

森美有紀



ご縁があり大学卒業と同時にアウトリーチ・センターに勤務して八年が過ぎました。

アウトリーチの授業を履修していなかった私は、この仕事へ配属が決まったことに正直不安を持ちました。しかし仕事が始まると、新たな知識が広がることへの興奮や、責任を伴う仕事に、日々心を傾けることができました。

た。働き始めてからの一年は先輩方に業務のご指導を頂きながら、与えられた仕事に一生懸命取り組みました。二年目には先輩や同期生の退職が重なり、センターの中心で運営していくポジションとなり、さらに大きな責任を感じるようになりました。さまざまな業務の中で記憶に残る仕事のひとつに、記録集を発行した二〇一五年があります。初めての試みで資料集めやデータ作り、原稿の修正作業に追われて毎日夜遅くまで学校に残りました。少ない人員の中で通常の業務を行いながらの編集作業には多くの時間が必要でした。拙い編集ではありましたが、皆様からうれしいお言葉を頂いて励ましとなったことが懐かしく思い出されます。

その後、三年目、四年目と年を重ねるごとに仕事にも慣れて、アウトリーチの取り組みをより深く理解し、気持ちの面でも次第に余裕が出てくるようになりました。ついに五年目となり、契約満了でアウトリーチを退職することになりましたが、津上先生からのお話を受けて、半年間の休業を経て再びアウトリー

チ・センターで勤務を継続することになりました。

その後、新型コロナ・ウイルスの感染拡大により世界中の人々が前例のない苦境に見舞われ、それはイレギュラーな形で業務の妨げとなりました。緊急事態宣言が発令された二〇二〇年四月には出勤することができず、在宅勤務の状態で新学期が始まりました。対面での授業ができないことに学生たちはどれほどのストレスや不安を抱いているのだろうか、音楽という音を奏でる芸術をどう届けていけばいいのだろうか、この事態に対応できる術を探り状態で試行錯誤する日々でした。しかし昨年末には多くのお客様が参加下さって、「子どものためのコンサート」も工夫を凝らし、開催できたことなど少しずつ前に進んでいます。この厳しい状況を乗り越えてがんばってこられたこと、長きに亘り私たちを支え、ご指導下さいました津上先生に心から尊敬と敬意を表したいと思います。音楽学部事務室の職員の皆様やアウトリーチに関わって下さった多くの方々、同僚の丹野桃子さんには心より感謝

しています。

私も今年度でアウトリーチを退職します。「子どものためのコンサート・シリーズ」は六十回目を迎えました。アウトリーチ二十周年という長い歴史の堅実な歩みに携われたこと、いまだ変誇りに感じています。これからもアウトリーチの益々のご発展をお祈りしています。

丹野桃子



私がセン
ターに勤め
て最初の「子
どものため
のコンサー
ト」は、大阪
北部地震の
影響で会場

変更、コンサート前日からの大雨による延期と、イレギュラー満載の七夕コンサートでした。

津上先生も先輩の森さんも出勤できない中、HP更新も一人で行ったことのない半人前が挫けそうになりながら対応に当たったことは、今でもはつきり思い出せます。そして三年目から現在に至るまでこのコロナ禍で、再びイレギュラー満載の子どもコ

ン運営。私にとっては通常のコンサート運営をできた回数の方が少ないです。

私がこの四年で一番求められていたことは「イレギュラーへの対応」だと感じています。イレギュラーの度合いは違っても、臨機応変にすばやく頭を回転させ、かつ行動に移せるかを津上先生やスタッフ、学生と知恵を出し合いながら形にしていきました。特にこの二年間の子どもコンは、会場や定員を検討するところから始まり、お客様は抽選・座席指定という今までになく膨大な仕事量となりました。このような事前準備はもちろん、当日にしなければいけないことも増え、学生スタッフの仕事もコロナ前とは変わりました。

このように運営方法はコロナ前と大きく変わりましたが、来てくれる子どもたちがコンサートを楽しんでる様子はコロナ前と変わりません。ハツとする様子、知っている曲に出会う様子、知らない楽器に興味津々の様子、子どもたちが惹きつけられていた姿をどの子どもコンでも目にしました。出演者たちがコロナ禍でも毎回さまざまな工

夫を凝らしてくれたお蔭です。コロナのお蔭で得た学びもありますが、一日でも早く、マスク着用なしのお客様で講堂一杯の子どもコンになるよう、願うばかりです。

私は学生時代から学生スタッフとしてコンサートの手伝いをし、アウトリーチの授業を履修しました。そして今、大好きなアウトリーチを支える仕事ができていることがとてもうれいす。大変なことは多くあり、立場以上に責任を感じることも多々あります。しかし一つの子どものコンが終わる度、履修生が最後の実習を終える度、「関わられてよかった」と強く思います。

今年度末で津上先生がご退任され、先輩の森さんもご退職なさいます。「私も一緒に卒業しようかな」と思う時期もありましたが、あと一年残り、次の新たなアウトリーチのステージへ橋渡しすることを決めました。新たなアウトリーチがどうなるか、歴代センター・スタッフのみなさん、既習生のみなさん、そして津上先生もどうぞ見守っていただく。

歴代センター・スタッフ一覧

氏名（在籍時）	卒業回数	勤務期間
早野紗矢香	120回	2005年10月～2007年3月（18ヶ月）
寺澤彩	120回	2005年10月～2018年3月（150ヶ月）
革島玲奈	119回	2005年10月～2006年3月（6ヶ月）
松川峰子	120回	2005年10月～2007年3月（18ヶ月）
中村公美	120回	2005年10月～2008年3月（30ヶ月）
南香代子	123回	2006年8月～2008年3月（20ヶ月）
井本彩子	120回	2007年4月～2008年3月（12ヶ月）
三上昌子	94回	2007年4月～2013年3月（72ヶ月）
藤野直	127回	2008年4月～2015年3月（84ヶ月）
井上真理子	123回	2009年10月～2011年3月（18ヶ月）
木村真理子	130回	2012年4月～2013年3月（12ヶ月）
中川裕美子	131回	2014年4月～2015年3月（12ヶ月）
増田明日香	131回	2014年4月～2017年12月（45ヶ月）
森美有紀	131回	2014年4月～2019年3月、2019年10月～現在（90ヶ月）
朝山加奈子	131回	2015年4月～2016年3月（12ヶ月）
丹野桃子	133回	2018年4月～現在に至る（48ヶ月）
神田幹子	133回	2019年4月～2019年9月（6ヶ月）

授業をサポートしてくれた人々

絹田朋子さん（元非常勤講師）



か？」と訊かれた時には、何で五年ほど前にご縁のあった『音楽によるアウトリーチ（実習）』というクラス担当の非常勤講師です！—と、いつでも即答してしまします。

津上先生が海外研修中でお留守だったとはいえ、クラス運営がスムーズに進むよう全ての道筋を作ってくくださった上、信頼おけるアウトリーチ・センター・スタッフの方々、困ったことがあった時には心強いアドバイザーをくださった林睦先生という具合に同僚や先輩方に恵まれ、何よりも学生たちから溢れるアイデアやエネルギーを感じながら、その仲間として仕事をさせて代え難いものでした。何事にも自分自身がアウトリーチ一学生だったため、学生として、さ

「あなたが今まで携わった仕事の中で一番楽しかった役目」

らに非常勤講師としての視点や感じ方への変化も新鮮でした。現在は社会人としての視点、子を育てる親としての視点、なんとなく体力や瞬発力が衰えてきたお疲れ系大人としての視点等が加わり、考え方もさらに違ってきただけで、当時の自分の仕事ぶりを振り返ると、学生に対してもっと他のアプローチ法があつたのではないかと、地域との関係をもっと模索するべきだったのではないかと、改善したい点もたくさんあるというのが正直なところなんです。

ただそういつた小さな後悔以上、当時の学生たちが現在も様々な場所で活躍し、「音楽によるアウトリーチ」も地域社会に益々根づくだけでなく、様々な地域の組織とコラボレーションを続けている様子を見ることが、心の中での小さな葛藤は無事昇華され、一時期でも関わる事ができたことをとても光榮に思います。

学生時代や非常勤講師時代の「音楽によるアウトリーチ」での経験を通じ、自分のできることを生かして地域に貢献し、自分と地域との間に絆を作ること。学び実践することができ、住んでいても重要なと感じる毎日です。

林睦先生（元非常勤講師）



二〇〇六年に海外研修に出られた津上先生の代理として、「音楽によるアウト

リーチ（講義）」を担当させて頂きました。自分の専門領域そのものの講義でしたので、喜んでお引き受けしました。アウトリーチの基礎を身につけることを目標とし、講義を聞くだけでなく、実際にアウトリーチ・コンサートやワークショップを企画し、実施できるようにすることをめざしました。受講生が皆、熱心楽しく学んでいた様子が思い出されます。グループで作成した企画案を練習し、ホールで発表しました。アウトリーチ実習ご担当の絹田朋子先生にもアドバイスを頂いたり、クリエイティブ・ミュージックのワークショップを体験したりしました。イギリス留学中、ライブ・ミュージック・ナウ！で日本人初の認定演奏家として活躍され

た絹田先生が、尺八で〈岡田山の雨〉と題したすばらしい即興演奏をされたことが鮮烈な印象として残っています。早いものであれから十五年余りの月日が流れましたが、女学院での楽しく美しい情景を今でも懐かしく思い出します。

歴代のアウトリーチ要員

東瑛子さん

（二〇二二～二〇二四年度）



私がアウトリーチ要員として関わった三年間、履修生の専攻編成や気質は学年毎にはつきりと異なり、それはチームとしての個性に直結していました。講義と実習を含めた一年半は、学生たちにとってはお互いを結

束させ、チームとして育て合う時間であると同時に、息つく暇もない学びと実践の連続であったでしょう。

実習現場では、先行するアイデアに技術と言葉が追いつかず焦ったり、時間が足りずやっつけ仕事の後悔を残してしまうこともありました。チームとしての成熟と、実習先への細やかな配慮と理解とのバランスをとり、「音楽で心をつなぐ」プログラムをつくり出していくこと。それは学生にとって最大の課題であると共に、要員である私が最も苦心したポイントでもありました。その難しさに葛藤を持たない学生はいなかったと思いますが、一人ひとりがその時その場で、自分の持てるすべてを差し出してプロセスに相對していたのが印象的でした。

「伝える」ために手を取り合う仲間、「伝える」先につながる相手、内と外の両方に向けて、丁寧なコミュニケーションを積み重ねていくこと。「音楽で心をつなぐ」あたたかな現場を、生み出すための鍵はそこにこそあるのだということが、伴走者としての私が得た最大の学びです。

谷田奈央さん

（二〇一五～二〇一九年度）



アウトリーチ要員としての五年間でたくさんの学生の成長を目の当たりにしてきました。

毎年最後の実習公演では、彼女たちの一年間の成長に胸を打たれたものです。

私は自身が立ち上げた音楽グループ「アンサンブルちようちよ」での三百回近い公演で培った経験とアナウンス・セミナーで学んだお話のスキルとを学生に伝えることが、要員としての務めと思つて毎週の授業に臨んでおりました。

興味深かったのは、毎年学年によつてカラーがとても異なっていたことです。早い時期にその学年の傾向を掴んで、響くアドバイスをするにはどうすれば良いのかを考え、学生にとつて話しやすい存在になれるよう努めました。

最初にアウトリーチ要員のお話を頂戴した時、長男を妊娠中でした。七夕コンサートの際は臨月で、学生がたくさんお腹を

撫でてくれたことも良い思い出です。子育てを通して、幼稚園公演などにおける母親目線からのアドバイスもできるようになりました。

学生たちから私が学ぶことも多く、時にはネタを拝借したいと思うプログラムもありました。当時アウトリーチ要員として接していた学生と、現在共演の機会にも恵まれています。

私にとってかけがえのない経験の五年間を与えてくださった津上先生、履修生の皆さん、ありがとうございました。

金丸史奈さん

(二〇二〇～二〇二一年度)



この二年間は、コロナ禍で十分な演奏活動ができず、今まで行わ

れてきたことが決して当たり前ではないと思い知った日々でした。学生のアウトリーチ実習も困難になりましたが、リモートワークによる演奏や、感染対策に配慮したプログラムでの実習など、アウトリーチの新しい在り方を追求しました。短期間で

履修生紹介

「音楽によるアウトリーチ(講義)」

履修生(三回生十四名)

田中杏実果(声楽)・・・アウトリーチの授業を受けて世の中の様々なアウトリーチ活動を知ることができて、自分のしたい活動を明確にすることができました。

安永さくら(声楽)・・・何のためにどのような目的で演奏を届けるのか。自身が演奏するだけではなく、社会に音楽を活かしていくための本質から学ぶことができました。

花谷瑞(ピアノ)・・・世界の各国が音楽の力を社会で活かすのにどのような取り組みを行なっているかを学び、音楽と社会との繋がりを考えることができました。

越尾里奈(ピアノ)



中村玲那(ピアノ)・・・音楽の持つ魅力について、改めて多くの視点があると気づいた。音楽の力を社会に生かすための手段を考えて実践していこうと思った。

高橋優佳(ピアノ)・・・授業を通して、自分自身もこれから音楽とどのように向き合っていくべきなのか改めて考えるきっかけになりました。とても充実した時間でした。

森友歌(オルガン)・・・アウトリーチについて学ぶだけでなく、発表やディスカッションの時間があり、皆で様々な意見交換ができて、充実していました。

島田紀香(ヴァイオリン)・・・コンサートを行う上で大切なことや知っておくべきことが分かって、勉強になりました。

隅田亜友子(ヴァイオリン)・・・コンサートを開催するまでの企画や準備の大切さがよく分かりました。今回学んだことを今後の音楽活動に活かしていきたいと思います。

鈴木ありあ(ヴァイオリン)



山田梨紗子(ヴァイオリン)・・・演奏会の選曲や構成、聴衆と一体となつて演奏会を作り上げていくためのコミュニケーションを基礎から専門的に学ぶことができて、視野が広がりました。

内藤友捺（フルート）…演奏だけでなく、アクティビティや司会など、細かな所まで工夫して聴いて下さる方のことを一番に考えてコンサートを作る考え方を学びました。

稲葉彩萌（クラリネット）…アウトリーチとは何かが履修前は漠然としていましたが、いろんな話を聞くことができて勉強になりました。

田上優希（トロンボーン）…授業では、大友直人さんが実際に行ったことも定期演奏会での工夫を学びました。斬新なアイデアを知ることができて、自分の引き出しも増やすことができました。



アウトリーチ・センターと共に 十六年半の歩み

津上智実

（アウトリーチ・センター長）



二〇〇五年
年発刊の
『アウトリーチ通信』
もお蔭様で
三十九号を

数えます。本号は「音楽によるアウトリーチ」の担当教員を務めてきた津上が定年退職を迎える節目に当たりますので、歴代のセンター・スタッフに勤務時のエピソードで心に残っていることを書いて頂きました。

二〇〇五年十月一日の神戸女学院大学音楽学部アウトリーチ・センターの設立以来、十六年半に十七名の本学卒業生がスタッフとして勤務してくれました（十二頁の「一覧」参照）。アウトリーチの既習生もいれば、そうでない人もいます。専攻や年齢もさまざまですが、それぞれが自分の持ち味でこ

の教育プロジェクトの大切な一齣を支えてくれました。紙面を借りて、改めてお礼を申し上げます。

十六年半を振り返ると、立ち上げの頃はもちろん、軌道に乗って実習が満載だった頃、近年のコロナ禍による変則だらけの頃と、それぞれ大変なことや苦労があったと分かります。地震や豪雨、コロナ禍による非常事態もありましたが、どんな時も誠実に、学生と音楽の場のために知恵と力を尽くしてくれたことを記して感謝します。

中でもアウトリーチ履修の一期生は私にとって特別の存在です。模索と試行錯誤の困難な道を一緒に歩んでくれた同士という思いです。とりわけ寺澤彩さんと早野紗矢香さんは授業開始の前年、宝塚市内の小学校で行われた「芸術普及活動」（と当時は言われていました）の見学会当日の朝、阪急南宝塚駅の改札前に現れた（当時の）学部二年生で、そこから長い道のりを共に歩いてくれました。

早野さんはセンターの立ち上げに尽力する一方、アメリカ出張やイギリス出張にも同行して、自分

の意見を言わないのはダメだと津上に叱責されたり、人一倍苦勞しました。フランスに留学して、今はストラスブルの教会でオルガンを弾いています。

寺澤さんは息の長い人で、大阪いずみホールと並んでアウトリーチ・センターにも十二年半、勤めてくれました。近年は本学非常勤講師としてハーブを教える一方、オーケストラ公演に飛び回っているのは何よりです。

同じく一期生の絹田朋子さんは二〇〇六年秋から一年間、津上が海外研修で不在中にアウトリーチ実習の授業を担ってくれました。地下鉄爆破事件にもめげずにオーディションを勝ち取って、英国の名誉ある「ライブ・ミュージック・ナウ！」の認定アーティストとなったアイディアとパワーの持ち主で、ロンドン在住です。

アウトリーチの一環である本学「子どものためのコンサート・シリーズ」も昨年十二月に第六十回を迎えました。本シリーズとアウトリーチ実習の歩み（二〇一五～二〇二一年度）については、この三月に記録集が出ますので、ご参照下さい。

これまで私はアウトリーチ・センター長として『アウトリーチ通信』の編集を担ってきました。実習をふりかえって言葉にするのは学生にとって学びを深める大切なステップです。出された原稿をみると、漢字と仮名の使い分けは人によってバラバラで、日本語として首を傾げる部分があったりします。誤字脱字を正して、漢字の表記を揃え、冗長な副詞等を削って締まった文章にするといった仕事です。創刊号から第三十九号までの文責は津上にありますが、割付やデザインは代々のスタッフが担ってくれました。題字のデザインが中村公美さんによることは先に記した通りです。本当に長い間、お世話になりました。

二〇二二年度からは新体制となります。「音楽によるアウトリーチ（講義）」は谷田奈央先生（音楽、非常勤講師、アウトリーチ五期生）、「同（実習）」は稲本渡先生（クラリネット、専任講師）が担って下さいます。神戸女学院のアウトリーチも新たなステージへと進化します。どうぞご期待下さい。

2022年1月22日 最終講義



ある日のセンター内風景
連携スタッフと
撮影：津上先生



2021年度 実習歴

10月16日（土） 子どものためのオルガン・コンサート(シリーズ第 59 回)

12月11日（土） 子どものためのクリスマス・コンサート(シリーズ第 60 回)

音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にてききな音楽のプログラムをお届けします。

♪幼稚園・小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、
子どものための楽しい体験学習を！

♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの
音楽プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター（月～金 10：00～15：00）
〒662-8505 西宮市岡田山 4-1 TEL: 0798-51-8584 FAX: 0798-51-8551
E-mail : outreach@mail.kobe-c.ac.jp <https://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

編集後記

いつか私も子どもを連れてコンサートに来校できればと思っています。本当にお世話になりました。（森）

新たなアウトリーチも素敵なものになるよう、支えていきたいです。（丹野）

2022年3月末日をもって定年退職します。長い間、ありがとうございました。（津上）